

Title	前号訂正
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1980
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.49, No.4 (1980. 3) ,p.170(448)- 170(448)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19800300-0170

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

るか」という点でとらえるのである。

牧野教授は、コール、片倉もと子両氏の遊牧アラブにかんする人類学調査報告にもとづき社会構造に「対立の逆説的統合」の原理が貫くことを強調する。この論証過程は、理解の容易なところもあれば、難しいところもある。メッカ近郊のワーディー・ファーマーの定着遊牧民における夫婦関係の説明は明晰である。結婚契約と結納金の慣行は、婚約と同時に離婚の可能性をも予測し、それに伴う措置が盛りこまれているが、これは結婚と離婚とがつねに背中合わせに併存する流動的な、契約によるアラブの夫婦関係を「対立の逆説的統合」の原理で法的に表現したものに他ならないというのである。

他方、ルブ・アル・ハリーー沙漠に遊牧するムッラ族の社会構造を個(Ⅱ家族)と全体(Ⅱ部族、支族、氏族)との一種の対立の場として理解する仕方は、難解である。季節ごとの遊牧移動、生態学的環境によってムッラ族の全体の中で有効に機能する集団が、部族、支族、氏族と流動的に変り、それに対して家族が常に自律的な存在であるという指摘は納得できるとしても、なにゆえに両者が対立的なのか、また、その対立的な事実をいうことによつて、ムッラ族の社会構造のいかなる特殊性を明らかにできるのか、必ずしも明確でないような気がするのである。

以上、私は各章の内容を紹介し、疑問と思われる点につき若干の批評を行ってきたが、最後に本書の価値を総合的な視点から述べてみることにしたい。牧野教授は、前著『創造と終末』においてもっぱら鍵概念の分析に絞っていた。このことは言葉をかえて

いえば意味論の分析を言葉にだけ限定して行っていたということであるが、本書では「対立の逆説的統合」を立証するために文の構造、とりわけ名詞文の性格に鋭くメスがあてられた。この試みは動詞文について問題が残されているが、意味論の新しい領域への踏みこみという点で高い評価が与えられるべきであろう。同じようなことは社会構造を意味論的に解釈したことについてもいえる。ただ、この場合、社会構造の概念が意味論と歴史学とではとり方が違うので、意味論の有用性がすぐにも社会構造の分析に結びつくと考えるのは速断というものである。セマンティクスは歴史学のフィロロジに依然としてとって代ることができないというべきであろうか。

(昭和54年、講談社(学術文庫)刊)

前 号 訂 正

「史学」第四十九卷第二・三号の三四頁一三行目の「籍」
 館府外国局日誌」の籍は箱に訂正致します。